

思いでの先生方

西森 茂夫 先生（61才）

## 父・西森茂夫

長女 西森 さと（57回生）



幼い頃より、父といえは「書齋で机に向かって」というイメージで、家に居ない時は近くの本屋を探せば見つかるような人だった。

そんな父の教師としての姿を見るのが出来たのは、47回生Hホームの卒業後初めての新年会で、当時伊野町枝川に住んでいた我が家でのことだった。

父は北海道大学獣医学部卒業後、地元札幌の高校で4年教鞭をとった後、高知に帰り母校土佐高で生物の教師として中1を受け持ち、新生活をスタートさせた。そのまま高3まで持ちあがり、卒業後、担任だったHホームの生徒が会費を安上がりで済ますため、我が家で毎年1月2日に同窓会を開くことにしたのである。

狭い我が家の2階を宴会場に開放し、私や弟は、この日はエビフライが食べられると目を輝かしながら、料理をすする母を手伝った。2階に料理

やお酒を運んでいくと、赤い顔をした人たちが楽しそうに語り合っており、そんな人たちを初恋にも似た憧れの気持ちでながめていた。酔っ払って下に降りてきて恋の悩みなのか切々と訴えるように打ち明け話をしている人や、ギターを片手に歌い出す人、全てが私には刺激的でこの年に一回の同窓会を楽しみにしていた。

後に47回生に伺うと、この当時の父は理想にあふれる青年教師という風で、生物の授業も、「なぜサルは木から降りてきたか」などというテーマでスタートさせたり、「赤いりんごに唇よせて」の歌が生徒に受け、「単身で北海道に渡ったが、帰ってきたときは4人だった」等と自分の話も生徒に話していたようである。

その後、76年より、また中1を受け持つことになった。これが57回生で、この第2ラウンドの際には学級新聞「根っ

こを定期的に発行したり、生徒と麦畑を作ったり、生徒や父母と交流を深められるよう、課外企画をいろいろ立てていた。当時私は、付属中の1年生だったが、同じ年の人たちということで、そんな催しに家族ぐるみで参加していた。

父が高知と徳島を結ぶ野根山街道を歩くという企画をしたことがある。父は北大の山岳部で鍛えていたから自信はあったのであるが、今から思うと無謀とも言える計画であった。約40名の人数で奈半利からスタートしたが、登山口までの道のりが長く、力のあるものは先へ先へと進み、父はへばった生徒の荷物を担ぎ、先頭に追いつくこととしたが、一隊はほとんど細長くなっていた。

途中休憩で、私の弟を含め数人がいないことに気がついた。もう日も暮れようかとい

う頃の出来事である。

父は山の中をサルのように走り、先に進んでいた生徒を呼びに行った。その後はぐれた生徒を探しに行こうというとき、彼らが道を間違えたことに気付き、独自で戻ってきてくれたから最悪の事態は免れたものの、2次遭難を恐れて、その場で待機していた私の脳裏には、翌朝の新聞の『土佐中生、野根山街道で遭難』という大きな見出しがちらつき気が気ではなかった。

こんな父のさまざまな企画も、当時の57回生たちには『またシゲオ（父はなぜか57回生からはシゲオという愛称で呼ばれていた）が何かはじめた』と必ずしも歓迎されていなかったようなふしもあるが、今となつては全て楽しい笑い話である。ただ、麦畑でママシに噛まれたS君は、「病院に行くとき、僕の車をバイクで走り、僕は自転車です。必死で後をついていったあのときの恨めしい気持ちはいまだに忘れられん」と真顔で先日語っていた。

さて、高1になり私もはれて名門土佐高に入学することが出来た。私はTホーム、父はお隣のHホームの担任、か



つ生物の教師でもあった。この関係を私なりに楽しんで、試験の前には父の書斎の隣の部屋でクラスメートと勉強をし、質問が出来ること。西森先

生、質問があります」とやっていたものである。それで娘の成績が良ければ父も何の不満もなかったであろうが、入学以来、すぐに入部したテニ

ス部の練習に明け暮れ、私は生物以外の主要科目は目も当てられないような成績。一度は進路指導会議に名前が出てしまったことまでである。いやはや何とも申し訳ない話である。

その私がようやく猛勉強をはじめたのは、ウェストバージニア州立大学への入学が決まっていたからのこと。英語で補習組だった私の「アメリカの大学で勉強したい」という無謀とも無知ともいえる申し入れに、「どつせ海を渡るなら、大きな海を渡ったほうが良い」とすぐ賛成してくれた父。父娘でかなりの怖いもの知らずといわれればそれまでだが、今でもこのときの父の決断とそれを理解し応援してくれた担任の中沢先生には感謝している。

「生物の授業を通して生徒に生命の大切さを教えたい」と語ってくれたことがある。その思いは平和への願いへとつながり、28年間勤めた土佐高を退職後も、自宅をつぶして建てた「平和資料館 草の家」の館長として、今なお、子供たちをはじめ、世界の市民へメッセージを送りつづけている。